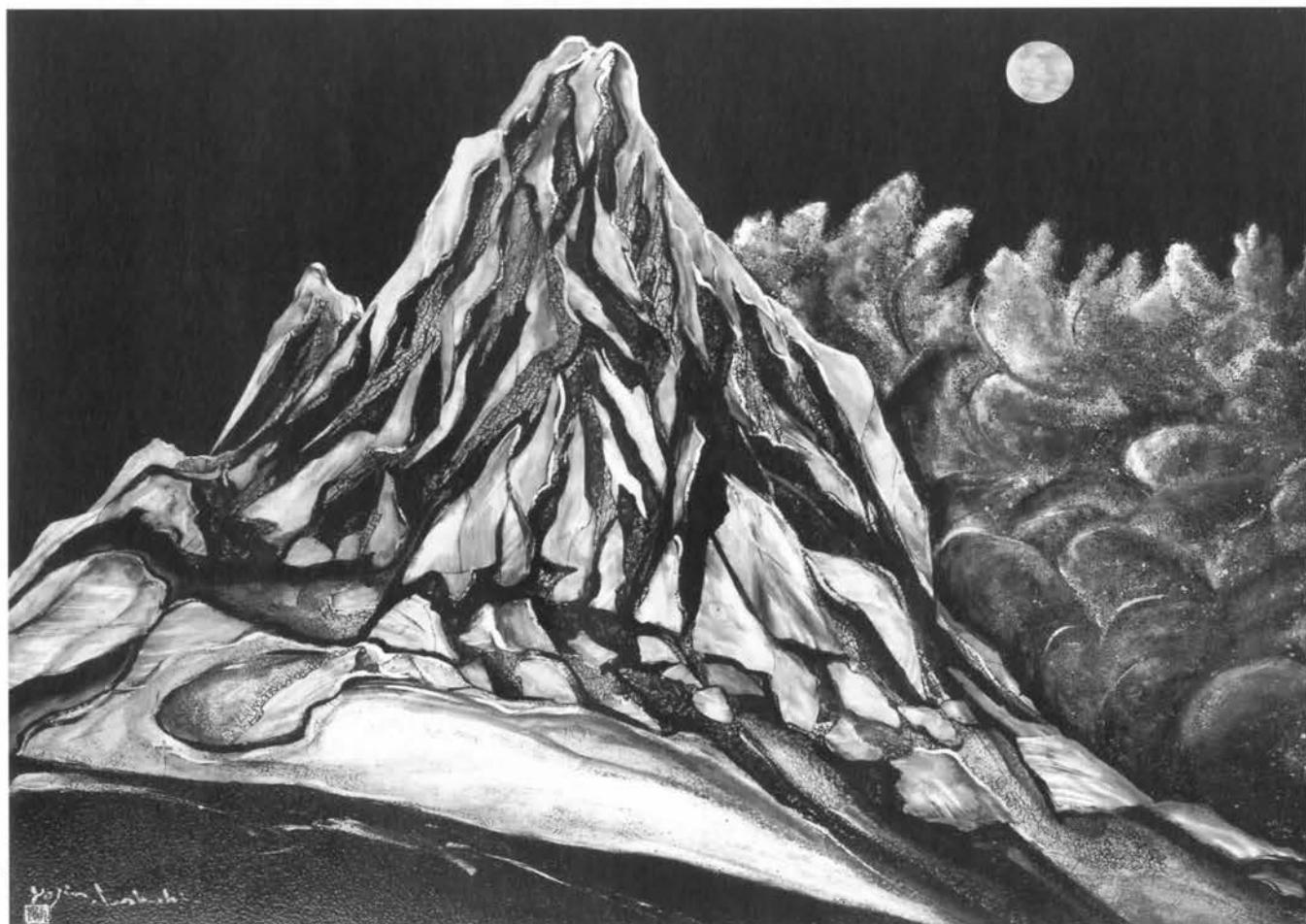


# 山と博物館

第54巻 第2号 2009年2月25日

市立大町山岳博物館



「孤高の刻」

漆絵画 (F50)

油彩画・水彩画・版画・水墨（墨彩）画等に手を染めて参りましたが、私だけの独自の表現世界を模索していた折、漆という画材に着眼、漆の持つ独特な色艶を作品に活かすべく挑戦し、その『成果』を、日本古来の伝統工芸品と一線を画すジャンルとして認知して欲しいとの願いを込めて、僭越ながら「漆絵画」と名づけました。色々な作品の内、今回は、厳しくも美しい山々と、その山みなみに抱かれた風土に生きる人々の、生の輝きの証しとも言える、躍动感あふれる祭りに絞って作品を出展致します。多くの方々にご高覧頂けたら、望外の喜びです。大町市・大町山岳博物館並びに関係者の方々のご厚意とご協力に心から感謝申しあげます。

「山と祭り漆絵画展」に寄せて  
岩淵 陽人

この度、日本の屋根とも言われ、衆人の憧れの的である北アルプスの玄関口・大町市にある国内随一の山岳専門博物館で、私の作品展「山と祭り漆絵画展」が開催されることは、幼年の頃より、雄大な山々を仰ぐこの地に育まれてきた私にとって、この上ない幸せです。

私は八歳の頃から、宗教学者の父・大殿に墨絵の手ほどきを受けました。父は、「絵を描く時、何を感じるか? 上手く描こうと思うな、技巧に走るな、自分の意図し、表現したいことは何かを先ず考えよ。」と教えてくれました。「絵は人生の羅針盤たるべきで、創作意欲の高揚が自らの存在価値を高め、生の喜びをもたらしてくれるであろう。」と諭してくれました。私は、今でも父のこの言葉を胸に刻んで励んでいます。

# 画業來し方行く末

岩淵 陽人

を彩り、或いは絵を描く時に頭をもたげてきます。

## 信州の自然に育まれた絵心



両親と二人の兄と一人の弟と書生と住んでいたのですが、父と母と長兄は既に庭に出て、大空を見上げておりました。家中まで色を映す程に空が燃え、右往左往する真っ黒い人影との対比に強烈な印象を受け、思わず「うわー、きれいだ！」と叫んでしまいました。父や母が黙して浮かべていた「涙」の意味を知る由もありません。

「静かにしろ。」と、私は父にたしなめられました。

昭和二十年三月十

日の、あの恐ろしい東京大空襲の深夜、場違いにも、私はひどく興奮していたのです。赤・朱・金色・黒……など多彩な色を鮮烈に見てしまつたのです。以来、脳裏に刻まれたこの色たちは、わたしにとつて色の原風景となり、今でも或いは夢

ある夜更け、突然の大音響で、寝床からはね起き、寝ぼけまなこで何が何だかわからぬまま、母を求めて廊下へとび出しました。私が小学校（当時の国民学校）一年生の頃のことと記憶しております。東京は原宿の家に、

その後、疎開を余儀なくされ、信州は会田村（現松本市四賀会田）の山深き岩井堂に移り住むこととなりました。ここは恵まれた自然の宝庫で、思う存分羽を伸ばし、のびのびと、「がつた坊主」の幼年時代を過ごすことが出来たのです。ズボンは擦り切ましたが、岩山が滑り台になりました。お堂の千手観音像によじ登つて昼寝してもバチは当たりませんでした。松の木の枝をむしり取つて、「チャーチルの首をとつたぞ」と、凱歌を上げたものでした。山や川や草木や鳥などの自然は、子供心におもねず、へつらわず共鳴してくれました。

今にして思えば、この頃の体験が画家を目指していた私にとって、良き糧になつてゐると思います。絵画

に一番大切なことは、何を意図として描くかということだと思います。絵画には、脳裏の画面がすべて完成しています。構図と言うより、平面に起承転結が表われ、色彩もされています。ですから、下書きは不要

といつより、邪魔になります。特に墨彩画の場合には、筆を変えると勢いを止めて、イメージがとんでもしまうので、運筆（付立筆）一本で一気に描きあげます。

## 漆絵画の特異性：

しかし、漆の場合は、工程が複雑でとても時間がかかるので、趣を異にするのです。先ずうるし板（キャンバス）にチョーク等で下絵を描くところからスタートするのですが、一気に着色しないと、硬化・変色してしまったり、にじみが生じてしまう恐れがあるので、自分だけの内なる風景を描くようになりました。一枚のスケッチをするにも、ただ上手に形を写し、自然の色を真似るのではなく、対象の心をつかみ、よく噛んで再構築した、自分が生じてしまう恐れがあるので、一度になりました。

作品作りに取りかかるまでに瞑想して時間も、時には、何日

漆にも種類があり、国産の漆は、主



漆絵画F50



漆絵画F30

成分が、水分が少ないウルシオールで純度が高く良質と言われているのに比べ、ベトナムやミャンマーの漆はラツコールが主成分です。長所もありますが、高温多湿という気象条件の下で、上手に漆を手なずけると、艶やかで質感のある作品に仕上がります。日本の漆より比較的かぶれ難いのも事実ですが、それでも大事なところが蛸足のように真赤にふくらみ、熱い、痛いで半べそかいて、現地の職人に笑われた事もありました。

一年の半分以上ベトナムに滞在して、今まで油彩画や墨彩画で描いてきた、色々なテーマを漆絵画に転写している私も、杜甫が「人生七十古来稀」と詠つた歳を迎えましたが、

漆絵画の奥義を極めるには、「六〇、七〇は、はなつたれこぞう、おとこざかりは百から百から」と豪語された彫刻家・平櫛田中に倣わなければならぬと、つくづく思うこの頃です。

制作ごぼれ話

…それは誤解だ…

### 「若一王子神社の流鏑馬」

漆絵画F 1 2

カンボジアのアンコールワットは、世界の三大仏教遺跡の一つとされているが、もともとは十二世紀にヒンドゥー教を奉ずるスールヤバルマン二世によつて建立された寺院で、天女（アプサラ）や女神（デヴァターン）の素晴らしいレリーフがある。ヒンドゥー教の遺跡は、インドを源流として東南アジアの各地に点在する。殊に遺跡にみるアプサラに惹かれた私は、テーマの一つとしてアプサラを描いてきた。それは、アプサラが、君臨して人間界を見下す遠い天界の存在としてではなく、触れれば素肌のぬくもりすら感じられてきた。それは、アプサラが、官能的な姿として彫られているからだ。きっと、このアプサラを彫った石工、彫刻師たちは、王様の命とは言え、当代、当地の憧れの美女すなわちこの世



の天女を思い、心をこめて刻んだのではない  
か。だから、お国柄、土地柄によつて皆違う。  
アンコール寺院群の壁面に佇む数多のアプ  
サラは、躍動感にあふれ、艶めかしくも心和  
ます笑みをたたえて語りかけてくる。とても立派  
なバストで、ラインアーバン・サラ  
が実に美しい。私は、暫しスケッチの手を休め、両手の  
ひらでそつと胸にさわつた。静かに撫でた。  
アプサラの心に触れたかつたのである。いに  
しうの名もなき石工のノミを感じたかつたの  
である。

「ところが、ところが……ここは、観光客でごった返す名所である。厳粛な気持でいたのだが、ふと気がつくと周りの雲行きがおかしい。男性は、遠巻きにニヤニヤ。若い女性は、「何よ、このスケベオヤジ。」と言わんばかりの白い目で見てる。つい今しがたまでスケッチブックを覗き込んでいた年配の女性は、興醒めしたようにブイツと姿を消した。「違うんだ、違うんだ。」と、慌ててスケッチブックをバラバラと開いて見せて、誤解を解こうとしてみても、もうあととのまつり。

大変だ――

「カイナイラーカイジー（何だ、何だ、この  
臭いはー）」

狭い部屋中に立ち込める煙と異臭、その発信源である世にも恐ろしい黒い怪物に私は呆然と立ちすくんだ。事の顛末はと言うと……インドシナ半島東部に位置する南北に長いS字型の国がベトナムである。北部の首都ハノ



イに比べ、南部にあるホーチミン市（旧サイゴン）は亜熱帯気候に属し、街中をゆったりとサイゴン川が流れている。私は、そこに小さな工房を構えて漆絵画作品を制作していく。一年中真夏というのが、漆という生きた材を扱うのにも、私の体調にも至極具合がよいだけでなく、どこかなつかしい昭和の香りがする不思議な活気が気に入つて、ベトナ

で、気に入つた良品を選び、用意するのが大変である。仕入れてきた大量の卵の殻を工房で更に厳選し、最良のものを先ずは白色の彩色に使用する。その他の殻は、内側に付着している粘膜を丁寧に剥がしてからフライパンで焼く工程に入る。ここでアルバイトの小学生の出番となる。いつも顔を出してくれる常連の子供たちがいるのだが、あるとき、メンバーが変わっていた。豆炭コンロにフライパンをかけてゆっくり炒っていくと、白い殻にだんだん色がついていく。新顔のA君、B君、C君にはそれぞれうす茶色、茶色、こげ茶色と割り当て、古参のD君は、一番時間のかかる黒と役割を決めた。暫しの休憩をとホテルに帰つたのであるが、少々疲れていた私は、ぐっすり寝込んでしまつた。3時間ほど経つていたらどうか、すでに夕刻。大急ぎで工房に戻つてみると、煙と異臭に包まれ、黒い怪物を戴いたフライパンを前に、煤けた黒い顔を上げてにつこり。歯だけが白い。

D君が言つたらしい。「黒くするには時間がかかるから大変なんだ。だから、一番長く仕事をする僕が一番たくさんお金がもらえるんだ。」それを聞いたA君。「それじゃ、僕が一番少ししかもらえないのか?僕たつて頑張るよ。」僕も、僕もと皆でしつかり頑張つて焼いて作つた「怪物」は、彼らにとつては、胸を張つて誇れる「労働の果実」である。子供たちにとって美術作品制作のための材料の色の階調が分かる訳がない。

「ありがとう。しつかり勉強しろよ。」全員に3時間目いっぱいのバイト代を渡した。労働報酬をしつかり握りしめて嬉々として家路に着く子供たちの後姿に、私は何か熱いものを感じた。

もの、ベトナム経済の急速な発展に伴い、物価がぐんぐん上昇しているのである。画材も然り。良いものを如何に安く手に入れるか？自ら調達することとなる。



岩淵陽人 近影

## ・漆とは…

岩淵 順子

漆と言えば、古くから日本人の生活の中に根付いていただけではなく、遠く欧米の家具・調度にまで名を馳せていた。これは、漆が小文字でJapanと呼ばれていることからも明らかであろう。漆の代表的な工芸法としては、漆を糊のようを使つて金粉などを蒔く蒔絵の技法、貝殻を嵌め込む螺鈿という技法などがある。

岩淵陽人の「漆絵画」は、こういった技法を踏まえながらも、作者が研究を重ねて独自に編み出した絵画作品で、日本古来の伝統工芸と一線を画すものと言えよう。色漆を使つた古来の「漆絵」には、平面的な文様を描き出す技法が使われており、デザイン的で静かな美しさが特徴的で、装飾的な工芸品とされていた。作者は、画材として漆を用いて、ムーバン（動き）のある絵画作品に挑戦したのである。

## ・多彩なジャンル・独特的な作風・

作者のテーマは、「日本の祭りシリーズ」「山々に抱かれた故郷の原風景」「アジアの遺跡・文化遺産シリーズ」「ヨーロッパの風景」「静物」「ジャズシリーズ」他、多岐に亘り、

## 「漆絵画」への道程

ジヤンルも、油彩画・水彩画・水墨画・彩墨画・版画・陶器絵付け・漆絵画と多彩だ。

そんな風に紹介すると、「見こ器用な何でも屋に思われるかも知れないが、作者は、至つて不器用者だ。何が不器用かと言えば、雑多に見える作品の底流に、誰のものでもない、誰も真似の出来ない一本の太い筋金が入つていて、磊落な性格

これが、独特な「岩淵陽人の世界」を形成している。



P100 漆絵画

## ・何たる早描き・

作者は、毎日規則正しく時間を決めてアトリエにこもつて絵を描くタイプではない。ある日、ある時、突然、夜中でも飛び起きて制作が始まつ。600号の彩墨画の大作「浅草三社祭り宮入りの御柱祭り」にとり組んだ時のこと、全く下書きもなく、筆一本でいきなり大画面の真ん中から書き始め、下から右から斜めから……と、実に奔放に、一気呵成に描いて、あちらこちらから下ろした筆の線が寸分の違いもなく初筆に収斂していった。記録係を務めていた私としては、動体予測のつかない早書きに途惑つたものである。

## ・漆との出会い・

洋画家としてスタートを切つた作者が「漆絵」に挑んだきっかけのひとつが、祭りの朱の色である。祭りに特色的な朱色、神輿や山車や鳥居を強烈に印象づける朱色。彩墨画では、乾くと紙が色を吸つてしまつ。「祭りの艶やかさを目いっぱい表現する方法がないだろうか」と作者は常日頃模索していた。そして、漆に着目した。

漆は、日本でも広く山野に分布、自生するウルシの木から採取された乳白色の樹脂から精製されたものを原料とするが、これがやつかいな生き物である。温度や湿度にやかまし

りや伝統をいつくしみ、守つてきた土着の人々の生きてきた土着の人々の生きている証し」と言う。

ここで強力な武器となるのが、作者の早描きと色彩感覚。スリランカの初代大統領の似顔絵を7分で描きあげ、同国でマスコミの話題をさらつた、定評のある早描きが乾燥・凝固に立ち向かう。多彩なジャンルで、特に油彩画において培つてきた独特な色彩感覚が納得するまで、妥協しない。作品には、豊かな色彩と質感によつて、動きや物語性が生まれる。漆や貝殻や卵殻の特性が遺憾なく發揮される画面を、光線・方角・角度を変えて見る。漆や貝殻や卵殻の特性が遺憾なく發揮される画面を、光線・方角・角度を変えて見る。

作者は、「漆絵画の工程は、非常に複雑で奥が深い。まだまだ」と語るが、次々と新境地が開拓されているようだ。

## ・新大陸へ・

最近、アメリカはロッキー山脈の麓にある美術館から熱烈なラブコールを送られていると聞いているが、近い将来、古来の伝統的なJapanが、見たこともない斬新ないでたちで新大陸に上陸した時、果たしてどんな評価が待つてゐるか、とても楽しみである。

(エッセイスト)

山と博物館 第54巻 第2号

発行 平成20年2月25日発行

398-0002

長野県大町市大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL ○二六一-二二一〇一

FAX ○二六一-二二一〇一

URL <http://www.city.comachi.nagano.jp>E-mail [sanpaku@city.comachi.nagano.jp](mailto:sanpaku@city.comachi.nagano.jp)